
現実の中で起きた夢

鈴乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実の中で起きた夢

【Nコード】

N1513A

【作者名】

鈴乃

【あらすじ】

私、池谷カズマはごくごく普通の高校生。強いて言えば：現実の中で夢を『起こせる』ことでしょうか？別に生活には支障とかは無いですよー。ええ。いつもいつも。私は（無いといいなあっ）と、思っているんですよっ？！

始まりの朝 [1]

自分は、今、夢のなかにいる。そう、自覚するのは、容易なことではない。

だから、俺は。あの日、あの時。本当に驚いた。



「…何か、俺」

朝、鏡に映った俺の顔は、普段見慣れているものとは、全く異なるものだった。

（俺に質問です。

私、池谷カズマは、こんなに髪が長かったでしょうか？ つか、ここまで目もパツチリでしたっけ？？）

しばし、俺の思考がフリーズする。だが、念のため説明しておくに、決して頭の質が、一昔前のコンピューターのように悪いワケでも、ウイルスにやられたわけでもない。

始まりの朝 [1] (後書き)

初めまして、鈴乃と申します。さて、読み終わった人なら誰か思ったであろう、「中途半端っ」の一言には、作者は何も反論できない次第でございます。『連載』と言う形で、ちみちみとやっていきたいつもりなんで、ご意見・ご感想、お願いですから、下さいっ！

始まりの朝 一 二 一

しばしの沈黙が部屋に落ち、少しずつ眠気も覚め、頭が正常に働きます。

(えっ? ちょっと、ちょっと待ってクダサイ。

何で? 俺、オトコだよなあ。

いやいや。嫌だよ、嫌ですよーっ! 『朝起きたら異性にへんしーんだなんて、売れない漫画家よろしくの展開なんて、おにーさんは認めたくないですってーっ!!』)

せっかく正常に働きたした頭には申し訳ないが、俺は当然のことながら、パニックになった。

(いや、マジまずいって。今日、平日じゃん! どーすんのよ? これから学ツコに…)

そこまで考えると、俺は『はい?』と、時計を見た。基本的に俺の通っている高校まで、どんなに頑張っても10分以上、通学(片道)にはかかってしまう。

ちなみに、今何時かと言うと。

(…8時25分? HR開始が30分からで、今から着替えて出たとしても…)

『完璧なる遅刻』。その言葉が俺の頭脳から導きだした、簡潔かつ正しい結果だった。

(まっ…)

朝、起きたら女になっていて、遅刻は決定の無残な現状。

「マジかよーっ!」

普段なら出せない、ソプラノの声が、部屋中に響いた。



(うっわー。嬉しいー。初めてソプラノの声が出せたよー) 半分やけになりながら、俺は着替え始めた。

(もう、いいや。

今日は休んじやえ。後で、メールか何かで、上手くごまかしておきやあ、いいだろ)

と言うかその手しか無かった。

俺は学生寮（勿論ながら、男子寮）に住んでいるため、今迂闊に出ていって、俺と同じような寝坊した奴等に会えば、変な噂がたつこと間違いナシであり、なるべく人目を避けなければならない。

（だあーっ。こんな時にアイツが来たらあ…）

『嫌だな』と、思った瞬間、背後でドアの開く音がし、ついでに、たった今『来てほしくないな』と思っていたヤツがにこやかに入ってきた。

「カーズマー！遊びにいかねえ？…って、うおうっ！！」

始まりの朝 一 2 一 (後書き)

さてさて。やっぱり中途半端なところで終わってしまいました、『始まりの朝』。このお話はここでおしまいで、新しい章に入って行くつもりなので、致し方ないと思って、どうか勘弁してやってください。

「えーと・・・誰っすか？」

目を白黒させながら我が友人にして隣人である、草野ケイスケがドアを開けたまま、突っ立っていた。

「えっ? ええ? 俺、部屋間違えてねえよな? なんで、カズマの部屋に女子がいるわけ? えーっ? だって、あいつ学ツコの女子からだって人気無いのに・・・?」

「おいっ、ちよつとまって! ケイスケさん、聞き捨てならない言葉をさらっと言うの、やめてもらえませんか? ってか、俺はそっんなに女子から嫌われてた覚えないんデスけどおー?」

「はっ? なんで俺の名前知ってんすか? 実は前から好きでした、ってな素敵イベントなんて、俺の計画には無かったはず・・・?」

（計画? ケイカクって何よっ? ! いやいや、ソコじゃない。今ツッコムべき所はソコじゃない!）

ツツコミは入れる所が多すぎて、中々上手いツツコミが出てこない俺は、取り敢えず正直に、

「俺だよ! 真正正銘っ! 池谷カズマっすよーっ!」

ツツコミ無しの事実を友人に突きつけてみた。

「・・・はへ?」

実に正直な感想を述べながら、ケイスケは引きつった笑顔で言った。

「えー? だって、君どっからどう見たって女の子じゃん」

「いやいや、見た目に騙されてはいけないぞ! ってか、俺だってワケ分かんねえーんだって。朝起きたらこうなってたんだからさあー?」

だんだんと泣きたい気持ちになってきた俺はケイスケに『分かってくれ』と、懇願に目を向けた。

「いやあー・・・そんな目えされてもなあ」

「ちよつと待て! 何故にそこで顔を赤くしながら視線をはずすっ?

！変な勘違いすんじゃないぞ！」

予想外の展開に俺は少々慌てつつ、ケイスケの考えを訂正する。
そんな俺を見て、ケイスケは『なんだ、違うのか』と、かなり残念
そうな顔をしながら言った。

「じゃあさ？百歩譲って君がマジでカズマだったと仮定して、質問
するけど・・・」

「信じてくれたんだなっ？！」

「カズマって実は女装趣味とかこっさりあった、変態さん？」

「やっと、分かってくれたのか・・・って、違ぁーっ！俺はヘン
タイさんじゃねえーっ！」

ぎゃあっ！っと、ソプラノ声が再び部屋中に響き渡った。

祝☆女の子でびゅうっ?! — 1 — (後書き)

だんだん、この小説のテンションがおかしくなっていってる感じがしてならない、今日この頃。ようやく第3話が書いて作者は嬉しいかぎりです。ちよつと、ミスったところと言えばケイスケ君には関西弁を喋らせるべきだったかと言うところですが、まあそれはぼちぼち考えて行きますか(爆)。今回も、最後まで読んでくださって、ありがとうございます。つきましては、ご意見やご感想、ご評価の方も宜しくお願い申し上げます!

「しかし、困ったなあ」

ケイスケは勝手に部屋の冷蔵庫から買い置きしてあるジュースの缶を取り出しながら呟く。

「ナニが？」

「せっかく、カズマと遊びに行こうと思ってたのに・・・張り切つて来たらコレがお待ちかねじゃん？ああ、カズマはいずこお」

「いや、俺がカズマだし。ってか、コレ扱いかよっ?! いやいや、それより飲み物勝手に飲むな・・・っつか、俺にもよこせよ?!」
「ツッコミキャラという、『新・自分発見!』をしちゃった俺は、取り敢えず、不満そうにジュースを差し出すケイスケから缶を受け取る。」

（ってか、こいつさりげなく『学ッコ行きません宣言』しちゃってねえ?）

「遊びにいくって、約束したからには絶対に連れてくつもりだったけど」

「だったら行きませんー?」

俺としては、ありがたいことこの上無い意見ではあった。

どの道、いつまでも部屋に閉じこもっているわけにもいかない。

ついでに料理が出来ない俺にしてみれば、外へ出ない!! メシが食べねえ。ってな公式が成り立つのである。

（・・・嫌だ、イヤだな、イヤデスヨー? ただでさえ、育ち盛りの俺にとっちゃあそんな些細なコトでもかなり堪えるんだからさあ・・・?）

「・・・何やってんのさ?」

どうやらはたから見た今の俺は頭を抱えながらベットの上がゴロゴロと転がっている、変な女にしか見えなかったようだ。

「なあなあ! お願いしますよ、ケイスケさんっ! この際、そんな高

いもじゃなかったら、何かおごるから、一緒に外に出ようよっ?！」

「ちよっ、待て！落ち着けカズマっ！目が血走ってるぞ?!！」

「腹減ってんだよー。いいからさっさとオモテ出ろや?」腹が減ると凶暴化するんですよー?っと、ケイスケをドアまで追い詰めつつ威す俺は、やっぱりはたから見ればただの変な女にしか見えないのだろう。

しかし、俺は大変なことを忘れていた。

「・・・そんなカッコで、外でもいいのかよ?」

「へっ・・・?」

整理してみよう。私、池谷カズマは目が覚めたら女の子になっていたワケで。

しかし、元々男だった俺にとっちゃあ、体に合うような服など無いわけで・・・?!

祝☆女の子でびゅう?! ― 2 ― (後書き)

ようやく、本編に進める・・・といった気持ちです。いや、作者的にココまでは序章っぽくやっていたわけで（いやいや、序章にしては長すぎだろう?）。さて、頑張るぞー! あ、でもやっぱり関西弁喋るキャラはだしたいな、とか企む私はやっぱりどこか壊れ気味なんでしょうか・・・? 最後になりましたが、今回もここまで、読んでいただきありがとうございます! 因みに『作者は実は関西人?』ってな質問が多々よせられました。違いますが、そこんトコなにとぞご了承ください。また、ご意見やご感想、誤字脱字の注意や評価などございましたら、どうぞ宜しくお願い申しあげます。

「よっしゃ。まあ、こんなモンだろ?」

得意げな顔をしながら、ケイスケは満足気な顔をしている。

「いいのかよっ?!」

どれどれと、鏡を覗き込んだ俺は慌ててケイスケに突っ込みをいれた。

確かに。アイテム全てが男用サイズだから、今の自分の体にはあわない(つつーか、超だぶだぶな)事は納得しておく。しかし、だからと言って。

「なんだよ、これはっ?! 何でガキの頃の服なんか着なきゃいけないっ! しかもヨリにもよって中一の時の体育着なんだっ!」

「だって、他にサイズ合うヤツないじゃん。中学の制服は学ランだったし。体育着ならそこのスポーツメーカーにもごろごろありそうなデザインだし?・・・どうかしたか?」

頭を抱えながらしゃがみ込む中一用体育着を着用の女になった俺。

どうしたのかと、首をかしげる学校サボリ魔にして隣人。

(・・・第三者がワケも知らずに見たら、きっと『着せ替えごっこして遊んでる怪しいカップルの図』ができあがってしまうんだろーな。うわぁ・・・ヤダし。男としてショック受けないはずがないだろっての)

「んなに服に不満あるんだったら、どっかで服買えばいいだろーが? ほら、さっさと外に行こうぜ?」

「・・・わぁーったよ! 行きゃあいんだろっ? 行きゃあさーっ!」
うがあっ。つと腹をくくって俺はケイスケを押しつけつつ玄関に向かう。

靴は、やっぱり中学の時に買った(が、使い損ねてまだ履いてなかった)スポーツシューズ。

「なんかオゴってなー?」

「分かってるっ！」

あー畜生。とか呟く俺を見て、にやにやししながらケイスケが俺を呼ぶ。

「なあなあ、カズマ」

「何？」

振り返る俺に、上機嫌でケイスケは言った。

「祝☆女の子でびゅうっ！」

数秒後、学生寮全体にケイスケの悲鳴が響き渡ったことは、言うまでも無い。

祝☆女の子でびゅうっ?!

— 3 — (後書き)

今回はちょっと（いや、かなりの）時間を空けての投稿となりました。い・・・いや？別にサボっていた訳じゃないんですよ？は・・・ははっ。コレも計算のうちで・・・。いつ、痛っ！やめてっ！にこやかな顔して殴らないでっ・・・ぎゃっ。（爆）真実を知りたい方は、作者プロフィールにレッツゴー☆えーと。最後になりましたが、今回も作品を読んで頂き、ありがとうございます。最近、読者の方々が増えてきてくださって、嬉しいかぎりです。今後も頑張りますので、これからもどうぞ宜しくお願いします。

もう一つの朝っ?!

自慢。

私・麻井由香は、この言葉が大好きである。

自分を褒め称えることが、好き。

自分を褒め称えてもらうことが好き。

相手に尊敬のまなざしを向けられ、照れながら一言。

「えゝ? そんなこと・・・」

コレである。この言葉を俯き加減で顔を赤らめながら呟くそのトキこそ、生きていて最高の瞬間なのである。

・・・なのに。

△

▼

「・・・ナニ? いったい何事っ?！」

朝、心地よい目覚めと共に枕元においてある小さな鏡を覗き込んだら。

そこに映っているハズの自分の姿が、いつもの可愛い自分の顔・・・ではなくっ!!

（いや、かっこいいけど? タイプだったけどっ!!）見知らずの男性だったら?!

絶対に誰だって驚く・・・っつか、パニックぐらいなっても、おかしくないのではないのだろうか?

取り敢えず、私はそういう奇妙な朝を突然、迎えてしまったワケである。

△

▼

「現状からいって、まずどうにかしなければならぬ問題は二つ

!!」

問題壺・服。

だって私は幼気な女子高校生っ！日々、自分磨きに専念していた私にとって女の子らしい服なら『コレでもかっ?!』て程あるんだけど。逆に言ってしまうえば、今の自分には『ウエスト細くて、フリフリのお洋服なんて着れるかっ?! 方式』があてはまってしまうのだ。わぁーい。やったね。そういや私には誇るべきお兄様がいるじゃん?・・・ってなワケで。

問題式・兄。

さてはて。この格好をどうやって兄貴に説明しよう? だってだって1。兄貴ってば、頭ガチガチのお人じゃん。あ、ついでにお歳は23歳。バリバリの『えりいとさらいまん』だよ?

上手くやれば服を借りられるんだろーけど。その前には『兄の納得兼了解』ってな超難題だ立ちはだかっているワケなのである。

「まあ、何はともあれ行動しないと先は見えてこないしね」

問題は二つ。

でも、それさえクリアすれば何でも上手いく。

私は、頭で勝手にそうなのだと結論づけて、意気揚々と自分の隣の部屋のドアをノックした。

もう一つの朝っ?! (後書き)

いやぁ。そろそろ作者的にも「いい加減朝から離れやがれっ」って思っているのですが・・・。なかなか、上手くいかないモンですな。今回は由香ちゃんのお話っす。あーこれでやっと話が繋がるぅと、ほっと一息つく作者。

そうそう、前回のお話を投稿した30分ぐらい(?)前に小説評価のほうにコメントが入っております。そのご意見を考慮しながら頑張って書いてみました。

コメント、も一度入れていただける(もしくはメッセージをいただける)と凄く嬉しいっす。どうぞ、よろしく願います(ペコッと頭を下げる)。

ではでは、今回も最後まで読んで頂き有り難うございます☆ご意見・ご感想、誤字脱字の注意や評価などがございましたら、作者の喜ぶ顔を想像しつつどうぞ言ってやってください。どうぞ宜しくお願いします。

「兄貴い。入るよ、入るね、入りまゝす♪」
ノリノリで由香はドアを開け放つ。

ん?と振り返った由香の兄、麻井茂は『ビキィッ』とリアルな擬音とともにプチフリーズした。(僅か3秒程)

「な・・・なんやねん。ってか、誰?」

当たり前といえど当たり前。当然といえど当然な反応だろう。

考えて見ましょう?(特に男性組みさん)

例えば。自分のすっごい可愛い妹が。ええ、そりやもうプリチイな妹が。

(カッコいいけど) 見知らぬ男性になっていたりしたらっ?!

「そりゃあ、メッキも剥がれるわな。おーい、兄貴。関西弁に戻ってる」

「ぬう。ええやん、家の中ぐらい。外で頑張ってるんやし」

「でも、微妙に標準語交えて喋ると、逆に変だよ?」

「そやなあ・・・って、だから、アンタ誰やっ?! 兄貴呼んでええのは妹の由香限定なんやでっ?! 特許取得済み(気持ち的に) なんかからなっ?! 覚えときっ」

(いいのっ?! ツツコミどころが『呼び方』のほうに集中しているんだけど・・・。)

由香は冷や汗をだらだら流しつつ、しかし、イイ言葉が見つからず。取り敢えず、兄貴の常識度を測ってみた。

「・・・私」

「はあっ?! 男が『私』とか言わんという。気持ち悪いわ。そんなんだったら、女になんぞもてへんぞ?」

「はあ・・・いや、別にモテるつもりは無い・・・ってか、私、女だしっ?!」

「・・・お前、精神病院抜け出して来たんちゃう? なんか、こう。」

外の世界に一度は触れてみたかったです系の古臭いネタ使いながら・・・」

「・・・っ！！兄貴！勝手に私の小説読んだでしょ？！ひっどい、わざわざ分らないように本棚に入れて紛らせておいたのにっ！！」
ぐぎゃあっ！と顔を真っ赤にしながらいかかる由香をみて、茂はうお。と椅子の上ながら大きく仰け反り、危うく転びそうになる。

（椅子ごと）

どうやら、兄貴の常識度は並みよりちょい外れたところがあるらしい。

そもそも、いきなり（しっこいが、カッコイイ）お兄さんが自室にノリノリで入ってきたところでしめださなかったのが、まずおかしい。ついでに、普通に会話していることがさらにおかしい。

そんなおかしいお兄様には直球で事実を突きつけましょう。

そう、由香は頭の中で確定ずけた。

もう一つの朝っ?! ― 2 ― (後書き)

ようやく待望の夏休みに入り、ほっと一息の今日この頃。でもでも!! ちょっと更新するスピードが落ちてきて焦っている最近でもあります (汗)

今まで投稿したお話を読んでみても、だんだんとテンションが下がりがつつあるなあ、ってちょっと実感してみたり。

これはいかんぞっ?! と思いつつ、ちょこちょこ短編にも挑戦しているあたり、つくづく懲りないキャラだなあって思います。(トホホ) あ、だから近々短編を更新するやもしれませぬ。気長に待っていて下さる事を作者は期待しておりますう;; (やっぱり弱気か、鈴乃さん)

それでは。ここまで頑張って読んでくださった皆様に感謝しつつ、ちよっとおねだりですw w ご意見・ご感想、誤字脱字の注意や評価などがございましたら、どしどしと。ええ、そりゃあ、どっかどかと。作者に送ってください。お願いします。

それでは、今後とも。どうぞ宜しく願います。

シンクロ（同調）

常識度が人並み外れた兄貴には、直球が効いた。

「・・・マジっすか？」

「マジっす」

この二言のみで会話が成立してしまうのは、もの凄く都合の良いことであるが、逆に兄貴の方が心配になってしまう。

（ホントにこんなんで『えりいとさりいまん』なのっ?! ってか、何も疑問も抱かずにいれる兄貴の頭って、ホントに正常と言っているのっ?!）

・・・多分、ダメだろう。



「・・・あの。ケイスケさん?」

俺達は学生寮を出てから、取り敢えず手短かにあいている飲食店（この場合、ラーメン屋だったワケだが）に入ることにした。・・・いや、むしろ俺がケイスケを引きずって連れ込んだ。

だが、それが間違いだった。あの時は腹が減っていて、取り敢えず食い物にありつければそれでいいや的考えが頭の中を支配していたわけだが、実際の現状から言うと・・・。

「あ、すいませ〜ん。ねぎチャーハンと餃子とライスと・・・あ、やっぱ塩ラーメンも。全部1つずつ追加でお願いしま〜す♪」

「って、おい! 聞いてんのか、この野郎っ」

もっと、よく店ぐらい選ぶべきだったと思う。連れが男である以上なんだってこんなに食欲があるのだろうか? ついでに言うなら、今俺の目の前で平和そうに食べ終えたとんこつラーメンのつゆを啜っているケイスケくんは、『早食い・大食い・何でもありの、食べることだけに生涯をかけそうな男』と友人の間では言われちゃってる

程のヤツなのだ。

（いや、俺が悪かったんだ。いくら腹が減っていても、判断力に欠けた俺が悪いんだ）

確かに、『何かオゴる』とは言った。でも、それは大して高くないものだったらの話であって、要はお財布の中がそこまで痛まない程度という意味であつたはずだ。そう、ケイスケに問いかけたところ、

「ん？だって、一つ一つは安いじゃん？」

と、軽く流されてしまった。

（なるほど。塵も積もれば山となるってことっすかー。うわあ、ケイスケ君、頭いい）

「・・・ってそう言う意味じゃねえだろうっ？！だあゝっ！もう、コレ全部夢であつてクダサイよろっ！！」

思わず、俺はそう叫んだ。



全部・・・夢であつて・・・

「ん？」

由香は取り敢えず茂と街を徘徊していた。

服を借りることは出来たし、かといってこのまま学ッコに行ける訳でもなく、有休をとった茂と一緒に朝ごはんを食べに出てきたのだつた。（本来、由香がいつも作っているのだが朝に素晴らしいハプニングがあつたため、作る気が失せてしまったのだ）

「・・・兄貴？今、何か言った？」

「ああ？いや、いってないけど」

すっかり関西弁を引つ込めた茂の返答を横目に、由香はこっそりと溜息を付く。

（だよなあ。何か今聞こえたことって都合良すぎなことだもん。そりゃあ、朝いろいろとコミカルなことばっかあつたけど、さすがに私も疲れているんだなあ・・・。幻聴・・・やばいかもおっ？！）

「・・・なあ、由香？」

「っさいなあ。何っ?! 兄貴、今私考え事して・・・」

「あれ、由香じゃない？」

アレ。と、茂が指差す方向に由香はい？と目を向けた。

茂が指差す方向にはラーメン屋があつて、その窓際には男女のカップル（・・・に由香には見えた）が座っていて、何故か男性の周りには在り得ないほどの皿が大量に置いてあつて・・・ってか、その向かいに座っている女性って由香だったりして・・・っ?!

（はあっ?!?!）

由香は心の中で驚愕し、

「・・・ってくれ」

「んあ？何か言ったか、由香」

「こんなの全部夢であつてクダサイっ!!」

大きく、人目など気にせずに絶叫した。

ラーメン屋の中にいる由香（仮）のほうも何か頭を抱えていたが、そんな行動したのは由香自身のほうであつた。

シンクロ（同調）（後書き）

ようやく、ラストシーンに入ってきた気分です。

とは言うものの、私のことですから『らすとしいん』何てモンがいったいどのくらいかかるのかは分かりませんがね。

それでも、皆様の生暖かい目線・・・だけどっ！気長に待ってくださいることを信じて（いや、願って）います。

それでは、今回も、最後まで読んでくださって、ありがとうございます。つきましては、ご意見やご感想、ご評価の方も宜しくお願ひ申し上げます！

他人志望

自分自身に自信があった。

スタイルよし、顔よし、頭よし。悪いのなんて性格だけで、でもそんなの猫をかぶていれば絶対にバレないって信じきっていて。

私は。麻井由香は、自分は完璧だと思い込んでいた。

（私は周囲より凄く優れている。他人はなんて劣っているのだろう？私だったらもっと上手くやるのに）

ある日、ふと、そんなことを思った。でも、それはいつものつまらない考え事のはずだった。

どうして、こんなことになってしまったのだろう？本当に、他人と入れ替わってしまうなんて。

『どうか、夢であってほしい』

そう、思ってしまうのは、甘えなのだろうか？



俺は平凡な一日。そんなものに憧れていた。

昔からオヤに進められた高校を振り切って、それより高いレベルの高校に努力に努力を積んで何とか受かって。

憧れの寮生活。憧れの自由な日々。

夢にまで見た世界に、あの時。あの、受験合格の日に俺は一步だけでも、足を踏み入れることができたのだと思った。

けど、実際、現実を見ると自分の理想と大きく外れていた。

少しでも自由時間を増やすために帰宅部したのに。塾やアルバイト。学校の宿題に予習、復習。友人達と遊びたくても、友人達とは予定が合わず、どこかへ出かけようとしても、資金がなくて結局アルバイトに勤しんだり。

何だかんだ言って、親元から離れたとしても、それで自由が手に入

るわけではない。

嫌でも、日々の多忙さに、そんな現実を実感させられた。

逆に、暇そうにしている周囲の人を見ると、羨ましくなってきた。

裕福は自由時間。

他人と摩り替ってでも、俺は自由を一度でいいから手にしてみたかった。

それは、俺自身の単なる甘えなのだろうか？



「すみません」

気が付いた時にはもう由香は声をかけていた。

目の前には、由香の姿をしている人物と、「盛大に食べました」と顔に思いっきり書いてありそうな青年が一人。「はへ？」と愉快的顔をして、由香たちを見ている。

「話したいことがあるんだけど、今、いいかな？」

由香は、先刻外出する前に鏡に向かって一生懸命プライドをかけて練習した、今のスタイルにあわせ、『男性バージョン爽やかに好感が持てそうスマイル』を試してみた。

他人志望（後書き）

さあさあっ！ここから3人称でいきますよ（苦手分野です、はい。）

やっときさ、ここまでこぎつけた！やったー。・・・など言っている場合ではないぞ、鈴乃さんっ！！

「ここまで投稿日数延ばすなんて！」

と、読んでくださった方達が絶対にご立腹のはずだあ（汗）

不定期な投稿で、本当にすみません。これからも頑張りますので、叱咤激励、ご感想、誤字脱字等の指摘やご評価がございましたら、どんどん言ってください。

では、今回も読んで頂き、ありがとうございました！！

オレンジジュース追加で。

「話したいことがあるんだけど、今、いいかな？」

・・・ぞわっ。

カズマとケイスケは本能的悪寒を感じた。

「えっ?! お・・・俺?! なんて、俺がそんな気色悪い笑顔浮かべながら話すてんの?!」

カズマの素直な返答に由香の片眉がピクツと動く。

「いやいや! それよりカズマ、なんでそんな礼儀正しくなっているかが問題じゃねえのか? やべえって、絶対に! 大地震の前触れか?! 明日の朝、起きたら地殻変動のため日本が沈んじやいました!、てへ。なんてコトになるんじやねえのかっ?!」

ケイスケの真面目な返答にカズマの拳がグツと握り締められる。

「・・・っ! いいよね?!」

由香は、あまりといえばあまりの二人の会話に起こり、半ば無理やりともいえる様にケイスケの隣に座った。続いて、それに習うように茂もカズマの隣に座る。

「なっ、なんですかつ?! いきなり隣に座っ・・・い、痛っ?!」

カズマは慌てて茂の進入を止めようとするが、茂は涼しいで、少し微笑みつつ、

「あ、すみません」

といかにも営業スマイルでカズマの頭に右手を置き、軽く体重をかけた。カズマは首からはグキツと嫌な音をたて、小さく悲鳴をあげてからしぶしぶ反論することをやめた。

「・・・ちよつと兄貴」

由香は鋭い眼光で茂を睨むが、茂の方はやれやれと言いたげに肩をすくめただけであった。

（まったく、兄貴ってば。何で、私の体なのに中身が違うだけでああも態度が180度急転換できるかなあ？元に戻ったとき、痛かったらタダじゃおかないからねっ！）

「・・・いきなり、何ですか？」

むすーっとしているカズマを見て、由香は内心頭を抱え込んだ。

（ほーらほら、怒っちゃったじゃない！それでなくなたって、非現実的なことを今から語り合いましょってトキに、相手の機嫌損ねていったいどーすんのよっ？！あぁっ！こんな奴らと話がしたくない。なんて言われちゃったらどーしよーっ？！）

しかし、そんな由香の苦悩などなんのその。

時間は待つていてはくれないよろしく、ケイスケと茂は待つていてくれるような代物ではなかった。残念なことに。



「話したいことって、何？」

（できました！ケイスケのナンパ癖☆☆ナンパに走るための判断力は光の速度より早く、ナンパのテクニクは星の数を凌ぐ！・・・が、しかし。ソコまでの腕を持ち合わせても、中々女の子をゲットできないのは、やっぱり本人の性格に問題があるが故のこと間違いなし。フラれた数も星の数くらってか？）

にこやかに、由香に微笑むケイスケの女の子センサーはバッチリカズマの形をした由香をキャッチしている。

ううっ。と怯む由香を、カズマはざまーみろと言ったように、テールにひじを立て、あごを乗せながら優雅（と本人は思いつつ、でも実は結構だらしない図）でオレンジジュースをストローで吸い上げていた。

そんなカズマを内心はらはら・外見クールに見ているのが茂は、今にも地震を起こさんばかりの貧乏ゆすりをしている。由香がそれに気付き、かっこ悪いっ！と鋭い目つきで茂を睨み、

テーブルの下で、遠慮手加減一切無く、茂の足を踏みつける。

ガンッ

「「？」」

カズマとケイスケが、何の音だ？と言うように頭にクエスチョンマークを浮かべる中、茂はテーブルにつっぷしって撃沈し、由香はおなじみ☆爽やかスマイルでケイスケの方に向き直った。

「いや、実は・・・さ。いやっ、別に怪しい話をしようとかっ！うわぁっ、何言ってんだ自分！いや、違っ・・・」

「君。朝起きたらいきなり自分の性別変わってなかった？」

どう切り出そうか決めていなかった由香がオタオタしているのを見かねて、いつの間にか復活し、背筋を伸ばしながら座っていた茂が、由香の言葉を遮って言った。

「「「・・・・・・・・・・」」」

僅かな沈黙が茂を抜いた3人の間に流れる。

三人には、それぞれ驚愕の顔つきが浮かび上がっていた。勿論、3人それぞれの意味合いは全く違ったが。

「なっ・・・・・・・・なぁっ？！兄貴ってば何単刀直入に言っちゃってんのってかそんなおかしい聞き方じゃこっちがヤバイって思われちゃうじゃないのよいやいやそれより何で私より先にいっつもおいしい所を言っちゃうのーっ？！」

「・・・・・・・・句読点がないぞ、そのセリフ」

冷静な茂のツツコミに、由香が引き、ケイスケが反論する。

「いやいや、ソコのお兄さん？そんなことを聞くって事はやっぱり、お兄さん？が元々の女の子なのっ？！おっかしーなー？俺のセンサーは確かにカズマの姿をしたこいつに向けられてたのに・・・」

「お兄さん？って一々聞かずとも、俺はれっきとした由香の兄だ。」

っていうか、センサーってなんだ？センサーって！由香をロックオンするなんぞ、お前似たいな、へなちよこにはまだまだハードルが高かろう」

「由香？へー、君って由香って名前だったのか」

「ばっ！兄貴ってば、何ぺらぺらと人のこと勝手に喋っているのっ？！」

「ねーねー、元の姿ってやっぱカズマの入ってるアレ？だったら、元に戻ったらお茶でも・・・」

「由香の予定は日々詰まっているぞ。そんなにお茶がしたいのであれば、俺が付き合うが？」

「お兄さん？は男でしようにっ？！何が楽しくてムサイ野郎と一緒に、ウフフアハハのお茶付き合いなんぞせねばならんっ？！」

「む。ムサくなどないぞ？それでも会社では彼氏にしたい男性NO1と結婚したい男性NO1なんだからな」

「うっわ。兄貴ってばそんなに会社で猫かぶってたの？」

「・・・すみませーん、オレンジジュースのおかわりお願いしまーす」

カズマは心ココにあらずといった雰囲気です3人の戦闘から抜け出し、一人でオレンジジュースのおかわりを注文した。

オレンジジュース追加で。（後書き）

ああ、今更なんだよと言われるでしょう、今日この頃。やっと、小説の更新に辿り着けましたよ。。。

だんだんと1ヶ月に一話投稿というリズムになってきてがつくりしてます。ってか、最初のうちなんて一週間に一話だったのに。。何?!この差はあっ。。。

さてさて、由香と同じく作者だって時の流れには勝てません（クスンツ）。いくら苦悩しようが、過ぎるモンは過ぎるんですっ!ってなわけで、なんとかこぎつけましたよ十話目まで。やっと二桁なんだー（しみじみ）。あとちょっとで終わるよーとか言っておきながら、中々投稿しないあたり、いくら話が短くたって長編と同じなんだろうーなあー、きつと。

毎度おなじみの言い方となってきましたが、でもやっぱりこの辺りしっかり言っておかなきゃね。不定期な投稿で、本当にすみません。これからも頑張りますので、叱咤激励、ご感想、誤字脱字等の指摘やご評価がございましたら、どんどん言ってやってください。

ではでは!最後まで読んでくれた人に感謝感謝ですww

戻りたい？

「ところでさ」

もうそろそろいいかな？とカズマは思い、話を切り出す。

隣には、再び由香に「うるっさい！」と水面下よろしくテーブルの下で攻撃された茂が、敗北しましたと言わんばかりの、寂しいオーラを発しつつテーブルに突っ伏している。正面では、ケイスケと由香が荒い息を整えようと、水を一気に飲みしているところだった。

「つぶはあー。ん？何か言ったか、カズマ？」

「いや、ケイスケじゃないよ」

「残念ながら、妹の渾身の一撃を食らってしまったているのでもう少し時間を置いていただかねば君と話すほどの気力が溜まらないけど」

「・・・や、お兄さんでもないから」

じゃあ・・・。そういう雰囲気の中、ケイスケと茂が視線を動かす。はた、とその場の空気が止まる。

「・・・え？わた・・・し？」

由香が、目をビックリしたように小さく見開いた。ソレに対し、カズマが小さくうなづく。

「うん。だって、最初に話があるからって入ってきたのは君でしょ？」

「う・・・。まあ、そうなんだけどね」

そうなんだけど・・・。と、もごもごと口の中で言葉を言う由香を見て、カズマは苦笑する。

「やあ、言いたいことは多分、分かるからいいよ、言わなくて。でも、ちよつと聞いておきたいことがあってね」

話を聞いていたケイスケがああ。と思い当たったように天井を仰ぎ見る。

「んー？カズマ。この子も、そっち系？」

「・・・っぽい。いや、もう面倒だし学ッコ休んでるし服とか不便

だし腹減ってきたら困るし。悠長なこと言っていないでさっさと片付けちゃおうかと思って」

「うわあー、ちょっと荒っぽいねえ」

「しょーがないじゃん」

「ちょっと、話余計見えなくなってくるから、途中で切れないでよ」
だんだん理解できなくなってきた由香が、慌てて二人の会話を止める。

「ああ、うん。それでさ。単刀直入に言っちゃうと、君、元の自分に戻りたいの？」

「・・・え？」

予想外のことを言われたのであろう、由香はなんともいえない微妙な表情のまま固まった。

その顔は、予想外・困惑・焦り。取り敢えずは、正直に言うべきか言わないべきかという逡巡が入り混じっていた。

「なんで？」

「だって、君が望まなきゃこんなことにならなかったもん」
かあつ、と由香の顔が赤くなる。

「どっ、どうしてそんなこと言い切れるの?!」

明らかに由香の顔には、羞恥を覚えた焦りの表情が浮かんでいた。

「だって、そうだもん」

「は？」

「だって、俺はそういう体質なんだもん。ヒトって、ほぼ例外なく、あの時あーすれば良かった、こーすれば。って後悔してさ。で、たまにいるのよ。自分なんかもう捨てちゃいたい。自分とは違う、誰かになりかわっちゃいたいって」

「・・・」

「分からない？覚えてない？君は、少しならず、凄く強く、自分を捨てたいって望んだんだ。いっそのこと、別の誰かとして生きたいと、願ったんだよ。それで、自殺とか、するヒトも世の中には、いるけど。けど、君は頭が良かった。死ぬことは決して自分への開放

ではないことも、死ぬってコトはあくまで「自分」という人生の中で、その存在を真っ当した終わりかたになっちゃうってことも、ちゃんと分かっていたんだ」

「・・・違うよ。私は、自分を捨てようと思っていない。私は自分が好きだもん。自慢だもん。他のヒトになりたいだなんて、思うわけ無いじゃん。」

「じゃあ、どうして寝なかった？」

「・・・え？」

「きつと、君は朝起きたら既に僕になっていたんでしょ？じゃあ、どうして改めて寝なかったの？夢なんだって割り切って、きつと寝たらいつもの日常に戻るんだって思って、寝なかったの？」

「そんなの・・・」

「思いつかなかった？」

間髪入れないカズマの返答に、由香が言いかけた言葉が、口の中で留まって、消える。

カズマの言葉は有無を言わさなかった。

見かねた、ケイスケが口を開く。

「カズマ、きつすぎー。女の子は、もうちょっと丁寧に扱うもんだよ」

「知らないね、そんなの」

「ゴメンなあ、由香ちゃん。コイツはこいつなりに言い分持ってて結構怒っているわけよ。他人に気配りできないほどにね」

「・・・怒ってるって？」

「だってさ、普通おかしくない？いくら由香ちゃんが別のヒトに成り代わりたいて思っていたとしても、なれるわけないじゃん。人格交換なんて、今の医学でできたっけ？できたとしても、相当お金がかかんない？」

「何が言いたいのか？」

「そこが、カズマの怒っているところだっけ。いいいの。世の中、個人の好都合のように回っていたら、今頃きつと人類は滅びてるよ。」

まあ、ソレはスケールがおつきすぎるとしても、個人の勝手な都合で、ヒトを振り回すのは、やっぱりおかしい。けど、由香ちゃんは、望んでしまって、ソレを叶えられてしまった。カズマっていう犠牲を出してね」

「犠牲って、私頼んでも無いことっ・・・」

「おっと、それ以上は言わないでね。そうじゃないと、俺もそろそろキレル」

「なっ・・・」

言葉が反射的に詰まる由香を見て、カズマとケイスケは顔を見合わせて苦笑する。

「やあ、な？犠牲になったってコトに怒ってるんじゃないよ、ないんだよ」
「・・・？」

「コイツは、そこまで君が頭がいいのにも関わらず、解決しようとしてないで、逃げたことが気に入らないって怒っているんだよ」

「分かった？と、小さく首を傾けて聞いてくるケイスケを、「一体何を言い出すのか？」といった感じでカズマが溜息を付き、言葉を繋ぐ。

「いい加減、お前の洞察能力には飽きが来るよ。どうして、そこまですべて完璧に俺の内心言い当てるんだ？恥ずかしくて、聞いちゃいけない」

「・・・ねえ、カズマ。褒めるか、けなすか、責めるかか、どれか一つにしてくれない？」

「・・・どうすればいいの？」

由香が小さく呟いた。

「逃げたんじゃなくて、本当に分からなかったの。勉強なら、ワークとか参考書とか、解決策がいっぱいあるでしょ？まして、答えがついてる。けど、分からなかったのよ。自分が嫌になった時に聞ける、ワークなんてある？参考書なんて、どこに売ってる？答えて、本当にあるの？」

「無いよ？」

いとも簡単に、あっさりと言ってのけられ、由香は「ほら」と、首を振った。

「だから、現実逃避してたの。願ったり、望んだりそんなことしか、私には思いつかなかったの」

「ソレが、逃げてるって言うことなんじゃないのか？」

ぽつっ・・・と、今まで黙っていた茂が、言った。

茂は、状態を起こし、椅子に座りなおしながら、話を続ける。

「参考書とか、ワークとか。無いことなんて、当たり前じゃないか？そんなこと、探すまでも無く、分からないと、言い訳を言うまでも無く、常識として、分かることだと思うぞ？」

「・・・」

「それは言い訳だよ、由香。お前は自分が現実逃避をしたという事実から、逃げたいだけだ。本当は、もう。自分の体に戻りたいんだろ？」

「・・・」

「でなきゃ、俺の部屋に来てまで。わざわざ、服を借りてまで、外に出て、原因を突きとめには行かなかったんじゃないのか？」

「・・・」

「後悔したんだろ？まさか、望んだことが現実になってしまってる。夢で終わらせるはずのことが、現実まで出てきてしまってる」

「・・・うん」

「じゃあ、戻れるよな？」

「・・・ん」

そこで、俺の夢は覚めた。

戻りたい？（後書き）

あと1話w wあと1話w w（二回言ってみた）

皆さん、お久し振りですーっ！！鈴乃です。

やあ、とうとう残すところあと1話となりました。ココまで来るにも、沢山のコメントがあつてこそ。やあ、作家の気分ってこんななのかなあ？（どんなのだ）

さて、テンション高めの私ですけど、言わなきゃいけないことは、まあ、忘れませんよ。

ってなわけで、最後まで読んでくれた人に感謝感謝ですw w
これからも頑張りますので、叱咤激励、ご感想、誤字脱字等の指摘やご評価がございましたら、どんどん言ってやってください。

現実の中で起きた俺

「・・・朝かあ」

くああ、とあくびをしながら、俺はベットを降りた。

「変な夢だったなあ」

自分が女の子と入れ替わってしまう夢。

「・・・散々な夢でもあったな」

結局、途中で覚めてしまったからいいようなものの、あのまま続いていたら、きっとケイスケとあの、女の子と女の子のお兄さんの、食べたもの全ての代金を払わなければならなかったのだから。

ケイスケに関してはいくらなんでも食べすぎだった。

「さあて、学ツコに行く準備を・・・」

しようかな？と、床に散らばった教科書を拾おうかとかがんだ、そのときであった。

「カズママーっ！！」

パンツ、と勢い良く玄関のドアが開かれる音がした。

「今度こそ、しっかり遊びに行くぞ！！」

無遠慮な声の音声は、明らかにケイスケだった。

俺は、がくーっ、とその場に膝をつきながら、でも、大声で怒鳴り返す。

「朝っぱらから、うるさいんだよ、お前は。しかも、今度こそって、なんだ今度こそって。大体、一昨日だって、遊びに行ったばかりだろうが？！いい加減、真面目に授業に出ないと、お前マジに退学くらうぞっ？！」

えー？と言いながら、ケイスケは断りもせずになかずかと、俺の部屋に入り込んでくる。

「一昨日ってったって、日曜だったじゃん。俺は平日に遊ぶほうが好みなの！」

「お前の好みなんて、聞いてねーっ！！」

「どーでもいいから、行こうよ？ほら、さっさと服着替えて・・・」
と、ケイスケが素晴らしいながら適当に俺の箆笥から、服を出そうと
クローゼットを開けたとき、

ドサツ

俺とケイスケの前にビニール袋が降ってきた。

勿論中身入り。

「何だよ、これ」

と、ケイスケがいかにテンション削がれましたといわんばかりの
声色でばやきつつ、がさごそと、袋の中身を物色する。

と、急にケイスケの手が止まった。

「おい、いったい何が入ってたんだ？」

俺が、聞いてもケイスケはただ袋の中を覗いたまま、いきなり別の
ことを話し始めた。

「俺さ。今日変な夢を見たんだ」

「へえ？」

「カズマが女の子になっちゃうやつ」

「・・・笑えないジョークだな」

「んー、ジョーク言ったつもりは全然無いんだけどさ。まあ、それ
で腹が減って二人で出かけたときの服がさあ」

「服が？」

「コレ、なんだけど」

コレ。とケイスケが見せて来た、俺の中学の頃の体操着。

「――っ?!」

この後、俺が慌てて財布を確認したのは言うまでも無い。

現実の中で起きた俺（後書き）

終わった……。終わっちゃいましたよう（号泣）

個人的に、お話しっていっぱい作ってはいますけど、最後まできちんと終わったことって無かったので、内心凄く感動しています。

……って言いますが、本当は驚きのほうがほとんどで、キーボードを叩く手なんて、「がたがたっ」と、震度7ぐらいのゆれを観測しております。

ではでは、最後まで。本当に最後まで読んでくださって、有り難うございますっ！！

いつものごとく、誤字脱字等の連絡も含め、皆さんからの意見・コメントをお待ちしております。

これからも、お話しを読んでもくださることを願って。

今まで、本当にありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1513a/>

現実の中で起きた夢

2010年11月29日06時45分発行